

「ほっかいどう歴史・文化・自然「体感」交流交換構想」に係る
活用イメージに関する懇談会（第3回）【議事録】

日時：令和2年8月20日（木）13:30～16:00

場所：北海道第2水産ビル3階 3S会議室

（所課長）私、文化振興課長の所でございます。よろしくお願いいたします。

本日は、お忙しい中、第3回の懇談会になります。第1回は3月13日に開催しまして、第2回目はこの状況にございまして、中止とさせていただいたところです。5ヶ月ぶりとなりますけれどもよろしくお願いいたしますと思います。

それでは、開会にあたりまして、文化局長の成田からご挨拶申し上げます。

（成田局長）本日は、お忙しい中、お集まりを賜りまして、ありがとうございます。

この4月から、文化局長を務めています成田と申します。どうぞよろしくお願いいたします申し上げます。

委員のみなさまは既にご承知のとおりだと思いますが、道では、北海道博物館、それから開拓の村、百年記念塔を含めました、野幌森林公園エリアの今後のあり方をお示した「構想」を平成30年12月に策定し、公表したところでございます。

その後、地元の方々などから、様々なご意見が寄せられたことを踏まえまして、本日お集まりの各分野で専門的な知見を有する委員の皆様方から、ご意見、それからご助言等をいただいた上で、「構想」の補完的な役割を担うものとしたしまして、野幌森林公園エリアの活用の方向性を「活用イメージ」として作成いたしまして、地元の方々などに丁寧な説明を行うなどして、「構想」に基づく取組を進めていくこととしたところでございます。

今年3月の第1回の懇談会では、野幌森林公園エリア内にある各施設をご視察いただくとともに、「活用イメージ」の取りまとめの方向性について意見交換を行っていただいたところでございます。

第2回懇談会は、先ほど課長からもお話がありましたけれども、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響によりまして、中止とさせていただきましたが、メールによるご意見等の照会をさせていただき、皆様方からいただいたご意見をお手元にお配りしている事務局案といたしまして、とりまとめたところでございます。

本日お示しする事務局案につきましては、エリア全体を、民間の活力を活用しながら、食や観光といった「賑わい」や地域や道民への「還元」といった視点でまとめておりますので、皆様にはぜひ活発なご議論等をお願いしたいと思います。

以上、簡単ではございますけれども、開会の挨拶とさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします申し上げます。

（所課長）本日のご出席の委員の方々につきましては、別紙名簿を付けております。なお、本日、菅井委員が欠席をしております。

本日の懇談会につきましては、おおよそ2時間半程度を予定しております。16時を目途には終了したいと考えております。また、感染症予防対策の関係で途中中断させていただいて、時間を調整する必要もありますが、よろしくお願いいたします。

本日の懇談会につきましては、道の「附属機関等の設置又は開催及び運営に関する基準」によりまして、議事録を作成することとなっておりますので、予めご了承をお願いします。それでは、石森座長、よろしくお願いいたします。

(石森座長) 先ほど局長と課長のお話にもありましたように、5ヶ月ぶりの懇談会ということですが、今年はコロナ禍の発生によりまして、皆様方のお仕事にも様々な影響が出ていて、多忙な日々をお過ごしと拝察いたしております。

従いまして、先ほど所課長のお話にもありましたように、懇談会のスケジュール等々が変則的になっていましたが、ようやく第3回目の懇談会の開催に至りました。

それでは、まず議題に入りまして、事務局から資料等々の説明をお願いします。

(所課長) 私の方からそれではご説明をさせていただきたいと思います。お手元に資料の1から3があるかと思えます。

資料の1につきましては、第2回懇談会が中止になりましたので、その時にメール等々でご意見をいただいた中に、それに対応する対応策になります。

これにつきましては、後程、改めて資料3の方で全体を説明する中でどういうふうに反映させていただいたということを説明させていただきますので、このペーパーでの説明は省略させていただきたいと思います。

それではA4カラーの縦型の資料2でございます。これは全体像でございますが、野幌森林公園の活用の方向性という形でまとめてございます。

一段目で、活用の方向性、イメージの検討ということになっておりますが、平成30年12月に構想を策定しております。それと最近の文化資源を巡る国の動向といったことを踏まえまして、野幌森林公園エリアが有するそういった文化ですとか、そういったものを活用する場、そういったことを目指していきたいということになっております。

そのためには、エリア全体を観光、食の視点ですとか、地域、道民といった視点、こういった観点と、民間活力を活用といったことを視野に入れて、今回の活用の方向性をつくっていきたいということでございます。

その下にポンチ絵がありますけれども、一番左側にありますように、平成30年12月に策定した交流空間構想、これをベースといたしまして、プラスする形で、今回エリア活性化の方向性という形で、具体的な活用イメージをとりまとめして、最終的には、今後、個々の施設の計画等に反映させていく。

例えば、開拓の村ですと、まだ仮称でございますが「利活用方針」、そういったものに反映させていくという考え方でございます。

2番目にその考え方を書いてございますが、左側に円の中に書いてありますが、国の方でも先ほど言ったように、文化観光を推進するような動きがございます。そういった中で、交流空間構想ですとか今回とりまとめる活性化の方向性、こういったものを考えていきたいということでございます。

右の方にはその実現に向けてということで、財源的な部分も書いてございますが、従来からの制度であります国の交付金の関係もそうですし、今回は新たに施行された文化観光推進法に基づく国の支援といったものも活用していきたいと考えておりまして、当然民間活力といったこういったものも積極的に活用して、実現していきたいと思えます。

3番目といたしまして、その実現に向けた進め方ということでございますが、当然すべてができあがるまで待つということではなくて、一番上にありますように、現状でもできることについては順次取り組みを進めていきたいと考えています。

また、2つ目の文化推進法の話については、第1回目の時に座長の方から資料提供いただきましたけれども、この文化観光推進法に基づく国からの支援を得るためには、地域計画を策定し、国の方で認可されなくてはならないという話になっていきますので、それについて今、国と協議を進めているところでございます。

そういうことも踏まえまして、具体的に開拓の村でいきますと、建造物の有効活用ですとか、民間活力の導入ですとか、北海道でもやっている北海道応援団会議、こういったものを活用していきながら、いろんな調整が必要になってきますけども、様々な取組をしていくというのが全体の説明でございます。

その次めくっていただきまして、A4横の資料になってございます。具体的にどのようなものを検討するのか、活用イメージがどういったものなのかということでございます。

まず右の上の方に、全体的なコンセプトや考えでございます。必ず訪れたい、何度も訪れたい観光施設にしていきたいと。文化への理解は当然ですけれども、食ですとか、自然も楽しめるという感じと、様々なニーズがございます。当然個人旅行で来て丸々一日そこにいられる方、それと、バスツアーとかでどうしても数時間の滞在になる方といういろいろな方がいらっしゃいますので、そういった様々なニーズに応じて、楽しめる空間にしたいと。そして、観光客だけではなくて、地域の方々が集まれるような空間にしたいということでございます。

検討の視点というのは、先ほど話したとおりですが、ここエリア全体、野幌森林公園エリア全体を通じての考え方として、5点ほどあげさせていただいてございます。

一つ目が、これはよく言われますけれどもキャッシュレス化ですとか、多言語化、そういったことを含めた利便性の向上を図っていく。それと、SNSですとか、インスタ映え。ようするに、こちら側から発信するだけじゃなくて、来た方々にも発信してもらえるような、そういったような情報発信の強化。それと、駐車場、レストラン等々の施設の充実。施設の充実については、先ほどの第2回が中止になった時のご意見を踏まえて追加をしたところでございます。それと、当然、そこに来手段というところで、バス交通の充実ですとか、例えば、野幌森林公園エリアは非常に広いエリアになっておりますので、施設間の移動も大変だという。アップダウンもあるのですが、例えば、そういうことで、レンタサイクルみたいなどころのもどうなのかというところで、利用者のアクセスの向上を検討に進められるのではないかと。それと、博物館としての役割等々だけじゃなくて、例えば、講堂や屋上の開放などによってユニークベニユーの推進も考えていったらどうかというもの。

それとエリア全体の視点として、下の方では、個々の場面場面での検討をしているところでございます。

まず中央上の方から見ますと、北海道博物館になります。

3点ほど出させていただいております。まず食の提供ということでございまして、今、北海道博物館にはカフェがございます。昔はレストランもあったのですが、今はカフェだけになってございます。そういったところで、もう少しカフェの充実といったところをあげています。今、コーヒーだとか、お菓子的なものを提供させていただいておりますけども、もう少しそういったところを充実した方が良いのではないかと。これは前回ご意見をもらって追加をしたところでございます。また、カフェの横にミュージアムショップがございますが、そこについては商品の品揃えですとか、もう少しオリジナル商品、こういったものを出した方が良いのではないかとということでございます。また、委員の方からご意見があったのが学術的な文献ですとか、そういったものを充実させるべきとございましたので、これについても追加をさせていただいたところでございます。それと、新たな楽しみ方の提供というところでございます。博物館としての機能を提供するのは当然ですけれども、ナイトミュージアム、これは毎日やるわけではなくて、週に1回なのか月に1回なのか、ナイトミュージアムで新しいお客さんをお呼びするような取組。それと委員の方から意見をもらいまして、VR、ARといったものの活用。こうい

ったものも追加させていただいたところでは、北海道博物館については、そういったような形で今後取り組んだらどうだろうかということで記載させていただいております。

また右の方には北海道開拓の村でございます。こちらの一番上は食の提供ということで、開拓の村はレストランがございますが、そこについては、さらに、メニューの開発ですとか、特に開拓の村は広いので、入口にあるレストランだけじゃなくて、園内の数箇所にカフェですとか休憩所、こういったものを開設したらどうなのかといったところでございます。また、施設として利用者が楽しめる機会の充実ということで、見るだけじゃなくて体験というところになると思いますが、これは委員の方のご意見もありましたけれど、宿泊体験をやったりだとか、歴史的な建物があるということでコスプレ体験、そういったところを入れさせていただいております。あとは民間事業者への開放ということで、フィルコミッションですとか、テナント貸し、イベントの開催。例えば、写真屋さん写真館を貸すとかですね。そして写真撮ってもらってコスプレとか。そういった形で民間事業者としても色々使い道もあるのではないかとございませう。次は無料エリアの開放ということで、これ委員からのご意見で追加させていただきましたけれども、今、基本的には有料エリアになっておりますが、お客さんを入れ込むためには、無料エリアを一定程度作って、そこからさらに有料エリアに入れていくような。まず、無料エリアにたくさんお客さんを呼んで、そこから有料エリアに取り込むような視点ということで、これについても追加をさせていただいているところでございます。もう1点が、こちら委員からのご意見で追加したところでございますが、そこには古い建物がございませうので、その維持というものが大きな課題になってございませう。そういった形での人材育成だとか、伝承とかそういったものとして活用できないのかってところで、委員の意見を踏まえて追加をさせていただいたところでございます。

続きまして、左側の方に行きまして、上の方が、自然ふれあい交流館、森林地区という公園の部分でございます。これについては新たに3つ程出させていただいておりますが、案内板の多言語化ですとか、用具のレンタルってということで、冬には歩くスキー、そういったもので、お客さんが来て楽しめるような仕掛けってというのがどうだろうと。それと、遊歩道の一部バリアフリー化、こういったことも含めて検討したらどうかということで、記載をさせていただきます。

そしてその下でございますが、北海道百年記念塔でございます。

これについては構想の中で解体もやむなしとさせていただいておりますので、記念塔が無くなった後のイメージになりますが、一番上にはメモリアルモデルの制作ということを出させていただいております。これは何かと申しますと、今、100メートルの塔がございませうが、安全性の面と経済性の面、将来負担の面で解体やむなしとさせていただいておりますが、記念塔に対する思いもたくさんありますので、縮小したモデルを作って保存するという考えでございませう。50分の1スケール、おそらく2メートル程度になると思ひます。そういったメモリアルモデルの作成をしたらどうなのかというのがあります。それと当然、色々なデータとかで思い出の記録の継承というのは、しっかりやっていくと。あと今、百年記念塔にある既存のレリーフについても引き続き何らかの形で活用できないかということを検討していく。それと百年記念塔を解体した後については、これも構想に書いてございませうが新たなモニュメントを設置していきたい。

最後は塔前広場ってということと、正面の駐車場のところでございますが、いろいろと花とかですね、木を植えるとかでございませうして、桜の植樹とか、フラワーパークという形で花を植えたらどうかと委員の方からもご意見いただいておりますので、フラワーパークということについて追記させていただいております。それと、特に地域の方々が集

まれる場作りということで、これも毎日という訳にはいかないですが、月に1回なのか週に1回なのか、飲食物の提供ということでキッチンカーを駐車場の方に導入してはどうかということと、ファーマーズマーケット、こういったものもどうかということで提案させていただいているところがございます。それと来られた方々の体験、遊びの場ということで、交流館の方もかぶりますけれども、スキーですとか、そりとか、そういったものの提供と、夏場においてはグランピング。これについては、委員会の方のご意見をもらいまして、追加をさせていただきました。そういった形で、今後、このエリアの活用イメージはこれに沿って検討していきたいと思っております。

また、参考資料の方になります。参考資料3番目に北海道百年記念塔を取り巻く現状という資料があるかと思えます。先ほど構想の中で解体はやむを得ないという形で決定しておりますが、その現状について補足をして説明させていただきたいと思えます。道では平成30年12月に策定した構想の中で、現状については老朽化の進行もございしますので、解体もやむを得ないと判断していますが、その後、いろんな方々から解体反対というような声が上がっているところがございます。その上にもありますように北海道百年記念塔を守る会、また、北海道百年記念塔の未来を考える会、そういったところから、「守る会」からは、平成31年の2月に署名の提出がございました。また、「考える会」は建築家の有志の方々ですが、こちらにつきましては公開質問状という形で、昨年12月と本年6月に、いろいろと記念塔を巡って、様々な方たちが活動されているというのが現状でございます。我々もそういった方々に丁寧に対応していきたいということで、公開質問状については回答したり、今年の6月になるのですが、「守る会」とか「考える会」の皆さま方に普段立入が出来ない記念塔内部を見てもらうということで公開をさせていただきました。当然、その前段では報道機関の方々にも見ていただいていますので、そういった形で内部を見てもらうということもさせていただいたところで。道の方では、平成30年12月の構想の中で、解体やむなしという形で判断しておりますけれども、経過ですとか、今後どういうふうにしてエリアの活性化を図っていくのか、これにつきましては引き続きこういった方々に丁寧な説明を続けていきたいというところがございます。

私の方からの説明は以上でございます。

(石森座長) どうもありがとうございます。ただいま、諸々の論点について事務局から説明をいただきましたので、それらの論点につきまして、皆様方からご意見をいただければ幸いです。

先ほどの事務局の資料説明の最後のところで、北海道百年記念塔を取り巻く現状について説明がありました。第1回懇談会の際に、角委員から百年記念塔解体に関するご意見をいただきましたので、先にこの問題を取り上げますので、角委員にご意見があればお願いいたします。

(角委員) 1回目の時にこの問題であまり触れないでと言われたので、ここで意見だけは言わせてもらおうかなと。

この建築家の連中っていうのは僕のところで色々資料を提供しているけれども、設計者もご存命ということで、この「考える会」にもその方が入っていて、100年は持つということで自信をもって設計したのに、100年持たないっていうのは、自分自身が納得いかないことがあって、それもまた背景にあるみたいです。

それから、建築家の方だけじゃなくて、実は周りにお住まいの高校生だとか、そういう人たちも、あれは原風景だったということで、何とかならないのかなという意見もあ

ります。

もちろん、私どもこの間見せていただいて、かなり状況はひどい。ちょっと言い方は失礼ですが、ちゃんとコンスタントにメンテナンスしてれば、あそこまでいかなかっただろうと。途中でやっぱり色々と費用がかかるということで、メンテナンスをやめていた時期があってそれが原因になっていると。ただ、構造体自体は、特に懸念することはないのではないかと。ですが周りのいわゆる我々の時代に、これはもう永久的に腐食しないと言われたコールテン鋼が実は全然役に立ってないということ、ああいうふうにはボロボロと崩れている現状を見ると、我々の学生時代には魔法の鉄骨だと習ったけど、全然そうじゃなかったということですね。

もちろん百年記念塔だけではなくて、私の知っている住宅なんかでは逆に錆がしっかりと止まって、60年ぐらいもっている所もあったりして、やっぱり石狩方面からの塩を含んだ風ですとか雪とかそういった、気象条件が相当ハードでそこへの対応ができなかったと思っています。

「考える会」に聞いたら、多分百年記念塔をもちろん保存、活用したいということもあるけれども、結果はどうであれ、プロセスみたいなものを大事にしていきたいということと、もし解体するのであれば、そこに至ったしっかりとした、次の世代に資料として残せるような形にしておくべきなのではないかというのが彼らの主張のようで。

私はこの会議に入っていないものですから、距離を置いてですね、拝見していたところでは。

色々公開質問状に対してご回答されているのですが、その次の反応とはどういうものか、その辺のことは少しわからないので、もしお分かりでしたら、その辺をお聞きしたいと思うのですが。

(石森座長) 事務局お願いします。

(所課長) 次の反応といたしますと。

(角委員) つまり回答を彼らが受け取った後ですね。変な話、納得したのか、さらに強固に動き出すのか、その辺は何かレスポンスがあったのかなと思ひまして。

(所課長) 公開質問状は2回来ていまして、昨年度の回答はさせていただいて、その後にもう一度、公開質問状が来たのですが、どちらかという解体しないで欲しいという要望の内容でございまして、我々も平成30年の12月に策定した構想がございまして、そこに沿った形で、解体はやむを得ないという形で回答させていただいているのですが、それに対しては8月1日までの期限を若干一週間ほど遅れましたけど、差し上げて、そのあとのリアクションがないってところです。

我々も送ったものに対してどういう反応なのかわからないのですが、先ほど先生からありましたように、コールテン鋼の話については、やはりあその立地場所が石狩湾から吹く塩を含んだ風が非常に強いということで、どうしてもその塩害というのがあるだろうと考えています。コールテン鋼ができてから、20年くらい経ってから、国の方でも指針ができたのですが、そういったような立地場所によっては、当初言っていたような効果が発揮できなかったというような話も出てきておりますので、そういった立地場所もあったのではないかと考えております。

当然我々も大規模修繕二回含めて、メンテナンスやっているのですが、それでもあのようになってしまったという状況でございまして。

(角委員) 状況は分かりました。彼らも悩ましいところで、悩んでいると思うのですが、少し気になるのは、せっかく活用イメージの野幌森林公園エリアのことは出ているのに、この部分がなんとなくやむやにしてしまうと、せっかく良いプロジェクトができて、ケチがついてしまうような気がします。最終的にこういう運動というのは、皆さんが納得するのは難しいと思うのですが、彼らも納得するような形で収めていかないと、せっかく良いこの活用イメージが、宙に浮いちゃうというか、台無しになってしまう。そこが一番僕が気にするところです。中々難しいかもしれないですが。

それから、当事者と言いますか、なんとかこういうふうにしていきたい会と行政との間の問題が、政治的な色々な駆け引きに使われることがあって、そういうのが一番嫌だなと思っています。

じゃあどうすればいいかと、僕にはすぐに解答は出ないのですが……。何かそこで少しでも、彼らの中で、やむを得ないということで、プロセスがある程度、しっかりと記録しておくとか。そういうところの落としどころなのかなという気もしないわけでもないですね。

(所課長) 先生もおっしゃられたように、開拓、百年記念塔の歴史と言いますか、経過もございますので、我々としてもそういったものをしっかりと後世にも残していきたいということで、当初の思い出、記憶の継承ということでデータですとか、地域でいろんな学校でも校歌とかに使われていますので、そういったものを残していくとか、そういうものを展示していくと考えていたのですが、それにあわせて、メモリアルモデルとしてミニチュアと言いますか、50分の1スケールくらいで、これはまだ検討段階ですけども、例えば、あそこで使っているコールテン鋼、解体材をそのまま使って、材質も同じようなのを使って、そういった小さいものを作れないかなということで、そういったものがあつたことをしっかりと後世に残していく。そんなことも考えております。

そういったところでご理解を得ていきたいなと思っております。

(石森座長) 本日は金子委員がいらっしゃいますので、野幌森林公園というエリアの価値についてご意見をいただければ幸いです。

このエリアは大都市に隣接していますので、本当はすでに開発されていてもおかしくないところを、地域の方々の非常なる努力で、現在にまで残されたという歴史的経緯があります。明治時代以降にこの野幌の地の原生林を守った人たちが存在したという歴史的な事実は極めて重要であります。

従いまして、記念塔について議論することも重要ですが、北海道百年記念エリアとしての野幌森林公園の価値を再認識することもまた極めて重要であります。現代世界では「自然との共生」は最重要課題になっていますので、「開拓」の重要性だけではなくて、開拓せずに原生林を今日にまで残してくれた先人たちの尊い尽力についても記憶に留めていくべきではないかと思えます。

金子委員にご専門の立場からご発言をお願いいたします。

(金子委員) 今お話を聞きしてしまして、確かに記念塔については、思い入れのある方もいっぱいいらっしゃる一方で、安全っていうことを考えると厳しいのかなということで、何か上手い落としどころはないのかなと感じているところです。

今お話があつたこの野幌森林公園、私の専門はもともと植物の生態学で、そのあと、

人工衛星画像とかですね、あとは、コンピューターで地図を作る GIS で地理情報システムというのが専門で、景観の評価とか野生動物の生息地の評価とか、この辺でいけば、去年ヒグマが出たところなので、地図をベースに作ってくれとか、そういうことをやっているのですが、そういう観点からこのエリアを考え、お話しをさせていただきますと、皆さんも秋や春にもものすごく景色が綺麗だと。森林が非常に綺麗で、大きな木もかなり残っているということで感じられるかと思うのですが、実はこの地域というのは、世界的に見ても、かなり残された中では非常に希少な地域だと。

昔は何年前ですかね、4年ぐらい前だったかもしれないですけども、世界のそういう植物の専門家の方が来られた時に、世界3大美林の一つだったと。低地に残されたという条件が付くのですが、非常に低い標高のところで、残された美しい森だというふうに言われる方もいらしてですね。なぜかという、ここ植物的に言うと落葉広葉樹と針葉樹、トドマツ、エゾマツ、そういったものが入り混じるところで、非常に秋の紅葉が綺麗でして。黄色と赤と緑とこの3色いろいろ混じる、この針葉樹と広葉樹が混じってますね、非常に色鮮やかになる地域っていうのは、日本の中でもそんなに無い。世界的に見ても、北に行けば針葉樹だけになってしまいますし、南に行けば常緑樹っていうのは、世界的に見てもあんまりなくてですね。ヨーロッパの一部とそれからカナダの五大湖のあたりぐらいしかないと言われてるんですね。

こういう塔の話ですけども、ここというのは、上から見ているところが実は無いんですよ。低い建物はありますけどね。だから、うちの大学でもですね、森林公園の活用っていうことで、例えば森林ウォークみたいな形で、少し樹冠と言いますけれども、森林の上に出て行って歩けるような遊歩道があったらどうだとか、そういう話があったり。

この塔自体も本当は上がって、眺望するというか、俯瞰できるようなことができれば、非常にその秋とか春の綺麗なときに、多分世界的にも非常に良い景観のポイントになるんじゃないかなというふうに思っています。

その他の動物についても、さっき話した熊が出てきたりとかしましたけれども、天然記念物のクマゲラがいたり、こちらの中でもかなり珍しいものもいると聞いておりますので、そういう面でも、いわゆる生物或いは生態系というところから見ても、非常に貴重なところだということで、やはり少ないこの森林地区も上手い有効活用に、この塔も何か絡めたものが出来ればいいなと感じております。

(石森座長) 大変貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございます。

ただいま、金子委員のお話にありましたように、低地・平地という条件付きではあるけれども、野幌森林公園エリアは「世界三大美林」の一つであると世界的に評価されているという点は極めて重要であります。「野幌森林公園エリアが世界三大美林の一つである」という世界的な評価につきましては、これまで意外に知られていないことです。そういう意味で、貴重なご意見を提示していただきました金子委員に対して、深々とお礼を言わないといけない気分であります。森林ウォークを含めまして、「世界三大美林」をより良く活用していくことは極めて重要ですね。

記念塔にこだわることも理解できますが、一方で世界的に高く評価されている「世界三大美林」の一つとしての「野幌森林公園」の価値をより大切に守り・育てていくこともまた重要であります。その辺について、生川さんはいかがお考えでしょうか。

(生川委員) 200万人都市の目と鼻の先で、専門家の方から三大美林と評価いただいているのは喜ばしい。

札幌市でも人口が増え、街灯りもそこそこあるということなのでしょうが、藻岩山は日本新三大夜景として、キャッチフレーズをうまく使い多くの観光客が訪れている。

市民の方との共存は大事にしないといけないのですが、限定的にでも、森林ウォークやフィトンチッドなどの取組はすごくポテンシャルが期待できると思いますので、ぜひ活用して欲しいと思います。

(石森座長) それと本日皆様方にご検討いただきたいのは、民間活力の活用をどう図るかということですが、すでにこれまでに皆様方からも様々なご意見をいただいております、それらを資料2、3の中ですでに活かしているところでもあります。

現在「北海道開拓の村」の指定管理者としての北海道歴史文化財団で業務執行理事として頑張らせていただいています中島委員に、どういう視点でも結構ですのでご意見を願います。

(中島委員) 今、石森館長から民間活力ですが、我々は民間といっても、もともと道の外核団体から出発しているので、中々純民間になりきれないところがあります。

今、コロナ騒ぎで、一番懸念しているのが、休館期間中の入場利用料金の補てん問題です。これがあるかなしかによって、私どもの指定管理者が来たるプロポーザルの時期に、指定管理者候補として手を挙げるか挙げないかっていうところまで、瀬戸際に立たされることになります。そうすると我々は法人そのものが解散ということ視野に入れなければならないという、平均台の上を歩いているという状況です。一方、札幌市さんの豊平館を指定管理者として運営していますが、札幌市はある程度の補てんを既に決定しています。全国の博物館の業界でも、やはり阪神淡路大震災、それから東日本大震災、それからもしかしたら来るかもしれない南海トラフというものを睨みながら、そういった公共施設、運営に対するものの考え方が変わってきていて、現況でもこのコロナでは博物館、特にその指定管理者並びに民間の博物館については、利用料金の補てんを決定している地域がけっこうあり、そこにいる職員もそれなりの生活が保障されるようです。今、この言葉使うのが嫌ですが、ウィズコロナとか、アフターコロナだとかを見据えた事業を企画、調整しているのではないのでしょうか。

今、我々が考えていることを、地域の方々に懇切丁寧に説明をしていくという話をされていましたが、例えば厚別12万人の人口で、元々は、北海道開拓記念館時代から地域の方々とコミュニケーション全然図ってこなかった。それは、指定管理者制度が導入されて、こういったエリア全体を私どもが指定管理者として運営させていただくことによって、例えば自然公園の木が住宅地に押し寄せて、ちょっと電信柱に引っかかっているとか、電線に引っかかっているという時に、その問い合わせの行きどころが我々になったのですが、そうすると我々が色々なことを住民の方に聞いていると、開拓記念館は何をやってきたのだろう、それから北海道は何をやってきたのだろうと、この地域の方々に対して。

今話し合われていることが立ち上がってどうやって説明していくのかなと思っております。

今更、貴方に何言われてもってということになりかねないのかなって。例えば道が説明するわけですけど、その窓口は、実際には北海道博物館とか、開拓の村になるわけです。開拓の村の場合は、幸いボランティア制度があって、200名のボランティア、支援者がいる。この支援者、我々の舵取り如何によってはすべてが圧力団体になるかもしれない

いですがけれども。ただ、その肝心の北海道博物館には支援者いないですよ。そういう組織がないんですよ。友の会一つでも出来ていれば、それを足がかりに地域の方々へのアウトリーチができたりするのですが、仮にこれを立ち上げた時にどういった手段でやっていくのかという時に、住民の方々から役人に対してアレルギーがある中で、「こうなりますから、北海道開拓の村は。こうなりますから、森林公園は」と言ったところで、ご意見、大半が我々のこのスキームに対する理解が難しいんです。

ですので、石森さんにはこれだけやって欲しいのですが、友の会を作っていたきたい。とにかくそれを急ぎたいというのがあって、支援者の役割というものは、私どもがこの昭和62年にボランティア制度を創立した時に嫌って程わかっていますし、彼らは、俗に言う第3の目になりますので、我々に対する、チェック機能を果たす役割になります。

例えば、我々が記念塔の代わりに観覧車作りますって時に「冗談じゃねえよ」っていうのがうちのボランティアです。ですので、そういった人たち、そういったコミュニティ作りをとにかく育てていかななくてはいけないという時です。

私たちは誰のためにやっているのか、何のために博物館はあるのかっていう気概が、少なくとも、申し訳ありません、北海道博物館には乏しい。開拓記念館から博物館に名前変わっても無い。何やっているか分からないですね。その何やっているか分からないというのは、この厚別東の住民の方々の方々のほとんどの考えだと思います。それだけ彼らは全く地域に足を向けてない、目を向けてないのが現状でありますので、今こうして、一生懸命無い時間を絞ってこういう会議を開いても、具体化して実践するには現場の手腕が問われていくわけです。

従ってそれを、例えば指定管理者さんお願いしますって言われても、我々は道が示したことを忠実にこなすっていう役割があります。ですから、ここに現指定管理者との調整や文化財とかお書きになっていますが、それよりも、この森林公園全体を北海道はこうするんだ。従って道民の皆さん、あなた方の役割はこうですって言うまで踏み込めるぐらいの気合い。こうしましたのでいかがでしょうかっていう相談ではなくて、こうしますから、従って皆さんにこれをしていただきたい。

あと森林公園のゴミを拾っていただきたい。2年前の台風の倒木をどうにか整理してもらいたい。あれだけ今、先生がおっしゃった、世界3大美林の一つだとしても、私は初めて知ったのですが、2年前の台風の始末もしないで。そのために世界3大美林の一つで、じゃあやりましょうかって言ったら、あんな現状見たら健康の良い人も悪くなります。私が推奨したヘルスツーリズムは最高に良いですが、それに比べたらちょっと人工的でも、札幌市が管理している前田森林公園とか、モエレ沼公園とか、人工的だけでもあんな気分良いものはありません、綺麗だから。

その辺を踏まえて、皆さんいかがでしょうか？ではなく、今私たちが行っている場を設けながら、じゃあ道民の皆さんもやってください、指定管理者もやってくださいとすれば良い。

ですので、例えばその森林公園の活用についても、今、森林公園のビジターセンターは、我々が管理しているふれあい交流館です。でもあんな交通の便が悪い所をすべての人に案内するよりは、博物館を活用するといい。博物館が中心になって、ふれあい交流館はサブ機能を果たす。知床行ったら羅臼とウトロにビジターセンターある。その役割をこの2,000ヘクタールあるわけですから、山手線一周が入ってしまう広さです。この広大な森林の情報発信をふれあい交流館だけで担うのは非常にきつい。博物館には優秀な学芸員たくさんいるんだから、そのパワーを少しでもそれを森林公園に向ければ、博物館が中心となり、ふれあい交流館が第2、開拓の村が第3の森林公園のビジターセン

ターになる。

そのビジターセンターの情報をどこが出すのかと言ったら、博物館がその情報ソースになるわけですよ。だって知床はあんなにお客さんが少ない知床博物館が情報の発信源なんです。知床博物館はお客さんいなくても、斜里町は絶対に潰さないんですよ。なぜなら博物館が情報の集積、発信の場であることに存在意義を求めているからです。博物館がなくなったら、羅臼とウトロのビジターセンターや道の駅は観光客に情報を発信できない。知床の番人である知床財団も不安になっていきます。

例えば、我々、指定管理者がえらそうに見えるかもしれませんが、それはここにおられる道職員の方よりも、私みたいな指定管理者が経験豊かになってきて、あなた方が知らないことを我々は熟知しているからです。北海道がしっかりしてくれれば、道博物館が機能してくれれば、私ども指定管理者と道は知床財団と斜里町のような関係を築けると思います。

たった今、森林ウォークと言いましたけれども、今、民間団体で元道職員の方で酪農学園大学の教授かな、小川巖さん。エコネットワークを立ち上げて毎週のように森林公園をお客さんを連れて歩いています。ああいった方々が団体にも入っていただかないと。森林公園内をくまなく歩いているんですね。

昨日、あるJRの特急乗ってきたんですけども、一車両に私と連れれの2人くらいしか乗っていない。これ商売になりませんよね。その中で考えたのは、これから数年後に、外国の方がたくさん入ってこられる中で、我々がどのような、ウェルカムをするのかっていう時に、キャッシュレス化とかバリアフリー化とか多言語化とか言われることは今さらで、それはもう道庁の方でやってくださいと。そういうことはここで検討することじゃないですよ。我々はもっと広い見地でかんがえなくてはならない。ところで、開拓の村、博物館の食堂の改善と言っていますけれども、私ども法人が一生懸命やってきたものを、ここで全部取られちゃうのかっていうふうに思います。勘弁してよっていうのもあるんですけども、そうじゃなくて、森林公園全体の中で、博物館をキーステーションにして、開拓の村とかふれあい交流館とか、大学がどういった役割を果たしていくのかっていうことが大切かなと思っています。

ですから、次の世代ですよ。今、我々は次の世代に向かって、俺らここまでするから、あと君たちがここまでステップを作ってくれという。今、どう見ても我々吸い上げちゃって、結局絵に描いた餅なんかで終わりそうな気がしないでもないんですけど。

そういうことを、すいませんがマイクを持たせていただいたので発言させていただきました。また振ってください。よろしくお願いします。

(石森座長) 日頃の鬱憤を含めて、色々貴重なご意見をいただきました。

ただいまの中島委員のご指摘を私なりに翻訳しますと、野幌森林公園エリアの活用を考える時に、一番重要なポイントの一つは、やはり「民・産・官・学の協働（コラボレーション）」による活性化を主軸にすべきである、ということかと思っています。このエリアの近くには、金子委員が教授を務めておられる酪農学園大学をはじめ、数多くの大学が立地していますので、「民産官学の協働」を図り易いエリアであるにも拘らず、これまでは効果的なコラボレーションが図られてこなかったことは事実であります。今後は、この野幌森林公園エリアにおいて、もっと良好なかたちで「民産官学の協働」を可能にする体制の構築が必要になります。そういう意味で、このエリアに立地しています「北海道博物館」の責任も重大であります。

天池委員にも、民間の立場で、何か追加していただくご意見がありましたら、お願いいたします。

(天池委員) 天池でございます。今日はありがとうございます。

そうですね、我々がといいますか、携わっているプロジェクトは、色々な問題を抱えながら、この間も伝えさせていただきましたが、最終的に目的をどこに置くかということかなと思っていました。

野幌森林公園は素晴らしいところで、この前も見に行かせていただいて色々な施設があって、歴史的建造物もあり、非常に持っているポテンシャルが高いかなと思うんですけども、それぞれ施設ごとに色々な目的があって、それを最終的に観光なのか、地域住民のためなのか、色々な目的があるのですが、どういうところに力を集約していくのかということのはしっかり明確になっていかないと。

先ほど先生がおっしゃったように、バラバラになっていってしまったということをごい感じておりました。いろんな思惑とか、色々な状況を見ても、このエリアとして、しっかりとした目的を決めてですね、優先順位を決めないといけないかなと思うのですが、博物館はもちろん道民、市民、周辺住民だったりがあるっていうことはわかりますし、開拓の村の方も、歴史的建造物だったり史料が非常に多いものですから、それをどこに発信するかということもありますし、あと申し上げたいのは、しっかり目標を徹底した上でそれに向けて、もちろん地域住民の方々の問題とかあると思いますし、観光客の状況もあると思いますし、このコロナの状況の中で、今後どういうふうに、これを変化させながら運営していくのかっていうところももちろんあると思います。

そこがやっぱり目的をしっかり見定めながら、対策や、改善改革っていうのをしていく必要があるのではないかなと思うのですが、我々も民間で考えますと、私も今見ている施設では、小樽にある美術館とか銀鱗荘という歴史的な建造物を利用している旅館とかですね、あと余市の方に観光果樹園とか参画させていただきましてですね。あと札幌にある美術館のプロジェクトやっています。やはり持っている地域とか、場所によって、或いは建物がやっている内容でこのコロナ渦の中で、影響が全然違いまして。はっきりとした数字は求められないのですが、実は銀鱗荘というのは、余市に建てられた建物でありまして、もう少し研究を進めていこうと思っているのですが、小樽にできたのが90年くらい前でして、増改築を繰り返しながら、今は宿泊部屋として14部屋、そんなに大きくない旅館ですけど。ただ、宿泊料金を下げたか上げたかという問題もありますが、実はコロナになっていない去年よりも実は宿泊のお客が増えています。去年より増えているという状況を作り出せている。

そして、余市の方の観光果樹園もちょっと札幌から遠いのですが高速が新しくできたことによって、市内から40分くらいあれば行けるという状況もありまして、北海道民の方の入園者数が120%増えています。もちろん海外のお客様はほぼゼロに近いですけども、海外のお客様は全体の構成比率の去年で20%ですけども、その20%がなくなっても、道内のお客様の伸びによってですね、売り上げ全体は前年並みをキープしております、そういう状況も作れている。

あとは小樽の芸術の美術館は、北海道の休業要請とかもありまして休んでいる時間もあったのですが、そういった期間を抜きまして、今ようやく、この1ヶ月くらいで入観者数が70万人くらい、7割くらいに復活してきている状況でございます。

ですから、それぞれがおかれている場所とか環境によっても違うのですが、やはり北海道の、我々がターゲットिंगにおいたのは、完全に海外のお客さんはゼロで、北海道外のお客さんもほぼ来ないだろうということで、自分たちが生き残るためには、道内のお客さんを掴むしかないということに今年の3月くらいから力点をおいて一気にいろんな対策を打ってきました。

それによって、少なくとも、売り上げは残念ながら確かに多少下がってはいますけれど、お客様の数で、やっぱり、賑わいを取り戻すスピードというのは、この8月の段階では徐々に回復してきているかなと思っておりまして。ただもちろん、去年の海外のお客様、インバウンドのお客様は少ないですけども、道内のお客様、札幌周辺のお客様が気軽に近くに行ってみようかというニーズを、ちょっと早めに対策を打って、完全にはならないにしろ、少し掴みかけたことによって、お客様の数の回復というのは少し早かったかなというふうには思っています。

あと今後の新しい拡大対策、あとはGO TO キャンペーンも始まっていますし、いろんな北海道さんも、小樽市さんも、いろんな独自の対策をやられているのですが、それとかも活用しながら、如何に、北海道、札幌が大拠点ですから、札幌のお客さんがまず、近場に行ってみたいなという感覚をまず掴むというところから、今やらせていただいております。そういった部分では、施設をどう建て直すのかというところと、早さとかスピードだとかというの踏まえて、計画に織り込みながら、やはり状況は刻一刻と変わりますので、ここにどう対応するのかというところは必要かなと思っております。

それも踏まえて、すべてどういった方向で進めていこうかという目的次第じゃないかなと思いますし、そこに立ち返りながらこのミーティングでは、そういった部分がもう少し、しっかり詰められれば非常に良いのではないかと考えています。持っているポテンシャルはとても高いので。以上です。

(石森座長) ありがとうございます。

民間活力を活かすことは極めて重要ですが、この野幌森林公園エリアにおいては、まだ民間の力を十分に引き出すところまで至っていないのが現状でありまして、とりあえず様々なメニューの列挙に留まっています。ただ天池委員のご指摘のとおり、民間が何かの事業を手掛ける際には、当然のことながら、様々な経営資源を一定の方向に集中して、最大の効果を上げることが当たり前であるわけです。そういう意味では残念ながら、まだそこまで至っていないのが現状であります。

天池委員のご指摘のとおり、優先順位を明確にすることが大切ですが、まだ特定の民間活力の導入が図られていないために、総花的にメニューを列挙することに留まっています。

角委員は網走監獄の館長をお務めになっておられますので、民間法人で頑張っておられる立場で追加のご意見をお願いいたします。

(角委員) 網走の方はですね、経営は別な団体というか、私は本当にあの建物のお守りなので、その他は詳しくわからないのですが、ただ少ないスタッフで何ができるかというの、絶えず毎日のように考えてくれていて、特に副館長が女性なのですが、彼女がいろんなアイデアを出して、いかに市民の方が気軽に来られるかっていう工夫を試行してくれています。

やはり、地域目線みたいなものですね、それは多分観光客よりもその地域の方が何度も訪れてくれる方が、結果的には地域に愛される施設だということで、普通ああいう施設は一度来ればいいというふうに思われがちですが、リピーターがすごく多い。それはやっぱりそこで子供達向けのイベントがあったり、親子連れのイベントがあったり、それからここで収穫したものを使って漬物つけたりですね。ある種庶民的な、私から見ると、どこでもやっているようなことがあの場所で行われていることが、実はすごく魅力になっている感じがあります。

監獄でピザを焼かなくてもいいのにといいながら、ピザ釜まで作ったり、その発想

はもともと、レンガを焼いていたということ、レンガを焼く登り釜も作って、そこで実際に子供たち、大きいレンガだと大変なので子ども向けに小さなレンガを焼いて、焼き上がった時にまたみんなで来てもらって、それを自分たちのものにして帰ってもらう。そういうアイデア満載で、必ず訪れたい何度も訪れたいと書かれているのですが、そういう目線はすごく重要なのかなというふうに思います。たまたまふっと見たら、ここでは観光、食と書いているのですが、先ほどの話だと、文化観光という言葉の方が、いわゆる普通の観光施設ではなくて、もっとここに行くことによって、様々な文化の理解があるということで、そちらの方が相応しいとちょっと思いました。

うちの網走監獄博物館は、入場料だけで維持しているのですが、昔から高い入場料を設定し、その後はなんとか頑張っただけで値上げもせず維持し、皆さんも最初は高いといいながらも現在は入場料を普通に支払ってくれています。

(石森座長) 現在の入館料はいくらですか？

(角委員) 1,010円です。これは35年前に作った時から1,000円です。できた時はですね、「なんじゃそりゃあ」というぐらいの高い入場料だったのですが。

ただ、昔来られて最近来られた方は建物の数が増えたことにまず感動するし、それから昔は移築した当時は、人間の汗のおいさとかそういうのがあって、それをすごく嫌がられた方もいたのですが、35年も経つとすっかり匂いも消えて、逆に重要文化財になったということもあるのですが、建物そのものの空間を意識して見に来てくれるというのはあります。

だから行刑施設として、日本の中では木造施設でまとまっているものがないというのは、一般の方でもある種、学術的な見方で来てくれるということが結果的には良くなったかなと思いますね。

もちろん開拓の村にある建物もみんなそれぞれが頑張っただけで、北海道の中から移築したもので、それぞれすごく重要なものがいっぱい移築されていると思っています。

なんか建物の価値を高めるような、ここには表現されていないのですが、例えば登録有形文化財とか、何かしらこう、北海道内だけじゃなくて、日本の中でも非常に貴重なものだっていうのを一つ一つ集積してくということも大事なのかなというふうに思っています。

先日、実は文化庁の調査官が別の用事で札幌資料館を見に来て重要文化財にしたいなって話をしていたのですが、その時に開拓の村にもいっぱい対応できるものがあるんじゃないのって言っていただいていたんですね。実はかつて、開拓使工業局の建物だけが重文指定になっているが、他にも該当するものがいくつかあり得るというようなことを文化庁の方はおっしゃられていたが、開拓の村側が中々うんと言ってくれないと。そんなことをちょっとこぼされて帰られたんですね。逆に言うと、そういう御意見のある調査官がいるうちに、逆手に取ってどんどん、価値を高めていくというのは必要なんじゃないかな。

というのは、うちの博物館は重要文化財になったことで、メディアに出ることがやたら多くなりましたし、もちろんゴールデンカムイの場面になったということで若者も増えましたけれども、やっぱり自分たちが一生懸命宣伝するだけじゃなくて、第3者がいるんなら形で、取り上げてくれる方が、ある意味では本当に全国区の施設になる。そういうことはあるような気がしますね。

やはり、そういう意味では開拓の村は本当に可能性がいっぱいあると思いますので、そのところをうまく戦略的に扱う、使っていくっていうのもあるのかなというふうに思いま

した。

(石森座長) ありがとうございます。

ただいまの角委員の「価値を高める」というご指摘は極めて重要です。

例えば天池委員は民間企業のお立場で仕事をされていますが、民間企業はシビアですから「協力して下さい」と言われても、協力対象がそれ相当の価値を有する物事でないと簡単には協力できないのは当然です。

そういう意味ではまさに角委員がおっしゃるように、例えば北海道開拓の村が有する伝統的建造物の価値をいかににより高めていくか、ということは極めて重要な課題になります。幸い、いま文化庁も「稼ぐ文化」の時代が到来して、文化行政、文化財行政に大きな変化が生じていますので、北海道開拓の村にとってもチャンス到来という面もあります。

生川委員はこのような問題について、どのようにお考えでしょうか。

(生川委員) 個人的な見解ですが、今、北海道観光の課題というのが道央圏にお客様が集中していて、地方との格差が大きいということ。今後、道内の7つの空港が民営化になってこれから連携し、観光客を周遊させることによって、偏在を解消していこうというような話もある。

少なくとも札幌市内については皆さんご存知の通り、新しいホテルが次々建設され、新型コロナはさておき、2年先3年先には通常に戻ると言われており、インバウンドが回復するまでの間は、国内の観光客に軸足を置いた戦略を描いています。折しも、中期の事業計画を今検討中ですが、議論なっているのは、ターゲティングをどこに落とし込むかということにある。

常日頃から、弊社の会長は、北海道は全国に先駆けて人口減少が大きいと。2035年から2040年には、そう遠くない未来に、今から100万人も減っていく。これに対し、交流人口の拡大で、つまり、観光客に来ていただくことで、道内経済を何とか保っていく必要性があると述べています。

(石森座長) たしか2035年ですね。

(生川委員) はい。やはり最大の課題だと思っています。訪れる観光客のターゲティングをどのように考えるのか。弊社のスタッフはさまざまな業界から出向しており、旅行会社、航空会社、金融機関、行政など様々な分野で議論していますが、少なくとも、リピーター、北海道に何度も来ていただいている方が大部分ですが、北海道を訪れたことのないミレニウム層に対ししっかり発信を行う。20代、30代、ひょっとしたら、修学旅行で訪れる学生にもアプローチする必要がある。ここに対し、手厚い情報発信なり、行ってみたくなる施策を打ってかないと、大変なことになっていくように思っていて、それをしっかり明記すべきだという考えになっています。

ただ、歴史・文化は、興味のない人にそれを強制するということは中々難しいのですが、当機構で実施しているテレビアニメ「ゴールデンカムイ」と連動した道内周遊スタンプラリーは、若年層に人気となっており、番組や本で紹介されたキャラクターを求めて道内を周遊しています。LCCを利用する新しい客層は、先に航空券をとって、そこから目的地での過ごし方は決める、あるいは滞在中にSNSで予約する(「旅ナカ」というような傾向もある。そういう新しい観光のスタイルが定着しつつある。

SNSが時代をリードする時代なので、やはり我々も対応していかなきゃいけない。そう

いう意味では、天池さんがいらっしゃる観光都市・小樽の悪口言うわけではないのですが、年間約 800 万人もの観光客が訪れるが、札幌滞在中の方が立ち寄るには適切な距離（位置）にあるからで、一方、札幌市内は、最近なかなか新しい観光コンテンツが見当たらない。新千歳空港から帰るまでの間、小樽に数時間立ち寄って、空港に行くような行動パターンが多いようです。

例えば、札幌の観光パンフレットを見てわかると思うが、札幌市としてのイチオシの大倉山、藻岩山、白い恋人パーク、それを前面に打ち出しているが、残念ながら、野幌エリアについては、ひょっとしたら裏表紙に近いところに掲載されている。やはり、見出しとまでは言いませんが、2 番目、3 番目でも良いのかなと。しっかりそこに掲載されるように、コンテンツの開発と磨き上げをしていかないといけないかなと思う。またそれは十分出来るポテンシャルをもっているのかなと感じている次第です。

札幌市内で開催されるコンベンション、自分の意思で訪れていない学会、大会の参加者に、翌日のアフターコンベンションとして、世界 3 大美林を体験してもらおうとか、価値を高めて、この地域に来てもらうという取り組みは重要であると思った次第です。

雑ばくな意見で申し訳ありません。

（石森座長） ありがとうございます。

先ほどから各委員が指摘していただいていますように、野幌森林公園エリアを活性化させていくためには、やはり地域との関わりが極めて重要だということですが、一方では、修学旅行生や観光客の誘致もまた大切であるというご指摘をいただいています。その際にディスティネーション・マネジメント・オーガニゼーション（DMO）のような観光専門法人の存在も視野に入れる必要があります。

では、ただいまから 10 分程度の休憩をとらせていただきます。

<休憩>

（石森座長） それでは、後半を始めさせていただきます。

前半のところで皆様にすでに大変重要なお意見をいただいております。それらにつきまして、所課長の方から少しコメントをお願いできますでしょうか。

（所課長） 何点か意見をいただきまして、その中でお話できるところを何点か回答させていただきたいと思います。

活用イメージを使って、今後地元説明を行っていく形になるのですが、それにつきましては、平成 30 年 12 月に策定した構想の時も、構想策定前に地元の連合町内会の方ですとか、そういったところにこちらの方から説明を行ってございます。そういったところを踏まえて、同じような形で今回も対応していきたいなと思っております。

また、貴重な森林資源というところで、それを上から見るとということですが、ご存じのとおり百年記念塔は 8 階が展望台というところで、なかなか高い所には行けないところで、実は今回の活用イメージにもありますユニークベニューの推進で博物館の屋上を開放していることを検討しております。若干、その百年記念塔の 8 階よりは低いですが、同等程度の高さということで、そういったところからでも活用できるのかなというふうに考えているところでございます。

色々な目的の明確化というところですが、最後の方でもまたいろんな視点もありましたけれども、やはりまず人に来ていただきたいというところで、そういった形と観光の

視点と、最後の方にあります地域としての視点がありまして、この二つの視点でもって、人に来てもらえるような施設、そういったことを大きなちょっとばふらっとなってしまうかもしれませんが、一応整理させていただいているところでございます。

また重文指定については、そういった価値のある建物がたくさんありますので、価値を活かす方向については引き続き検討していきたいと思っております。

(石森座長) ありがとうございます。

ただいま所課長からご指摘いただきました展望台のことにつきましては、北海道博物館の屋上にも展望空間を設けていますので、より良く活用を図っていく必要があります。しかし屋上を入館者に開放する際には安全確保のために職員を常時配置しないといけない、という条件付きになります。

いずれにしても、金子委員が提起して下さいました「世界三大美林」を俯瞰していただくためには、北海道博物館の屋上を活用する必要があります。

それからもう一つ重要な変化があります。今年5月に施行されました「文化観光推進法（文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律）」に基づく、国による支援であります。文化観光推進法に基づいて国からの支援を受けることができるように、文化振興課並びに北海道教育委員会が連携して、地域計画の申請準備を進めています。その際に、この野幌森林公園エリアも組み込んだかたちの地域計画が検討されています。

ご存知のように「民族共生象徴空間(ウポポイ)」が白老の地で7月12日にオープンしており、1ヶ月で約3万5000人が国立アイヌ民族博物館に入館しています。政府は当初年間に100万人の入場を目標にしていたのですが、コロナ禍のために実現は困難になっています。いずれにしても、政府はウポポイに約200億円の国費を投入しています。ウポポイはまさに文化観光拠点施設で、アイヌ民族文化をテーマにしています。一方で、野幌森林公園には「開拓」をテーマにした北海道開拓の村があります。そういう意味では北海道における文化観光の拠点としてウポポイと共に、このエリアが重要であるということです。

先ほど、金子委員から野幌森林公園は「世界三大美林」の一つであるという大変勇気づけられるお話をいただきましたので、この貴重な自然林をどのように活かしていくべきかについて、アドバイスをお願いいたします。

(金子委員) ありがとうございます。

先ほど平地のですけれども、三大美林っていう話をしましたけど。後で事務局の方にその辺の資料とか提供させていただこうかと思っておりますけれども。多分あんまりこういうことって知られてないということは逆に、価値がないっていうか、先ほど価値を高めるってありますが、価値が多分知られてないっていうところが結構大きいのではないというふうに思って、その価値があるというところから始まれば、結構高いステップから始められると思います。お金をかけずに、色々なことができるのかなというふうに思います。

それで、その価値については、多分これもあまり気がつかれてないところで、江別、私今は酪農学園が江別市にあって、野幌森林公園も大部分が江別市にあるのですが、江別市っていうのは大学が4つもあるんですよ。酪農学園、北海道情報大学、北翔大学、札幌学院と4つあるんですよ。その他、北広にも星槎道都というのもありますし、高校もですね、この森林公園の周りにいっぱいあるんですよ。啓成高校、立命館、北星とかもあったかな。あとは、とわの森三愛高校とかですね。この教育施設と言いますか、

学校を活かさない手はないじゃないかなというふうに思うんですよね。

その一つとして、例えばこういった所に研修所みたいなものとか、宿泊施設、簡易宿舎でいいと思うのですが、そういうものを作って、必ずそういう高校生なり大学生はそこへ来て合宿するというような形で、森林公園をこの自然をお勉強しますよ。或いはこの開拓の村に行って歴史を勉強、建物を勉強しますよ、博物館行って勉強しますよっていうことであれば、一つのカリキュラムができてくると思うんですよね。

だから、その野幌の森林公園の周りだけじゃなくて、これは多分、全道的にいわゆる地域を巻き込んだ形での観光に繋がるっていう教育っていうものができるんじゃないかなというふうに感じるんですよね。

その中で何か面白い研修所とかないかなくてアイデアないかなと、さっき考えていたんですけど、実は開拓の村にこれ炭鉱街ってないんですよね。実は僕は出身が赤平市で、いわゆる昔の炭鉱住宅、炭住っていうのが、部屋と共同トイレしかないような、ああいう施設がもしあれば、そこの中にも宿泊体験とかって書いていますから、そういうところに学校の生徒さんとか修学旅行だとか来て、そこで泊まってもらって、まさにその一つ一つの部屋にトイレがあるわけじゃないので、共同トイレはボタン式だとちょっとということで、そこはちょっと綺麗にして、そういう昔の炭鉱の生活を味わってもらえるような体験型の宿泊と、自然、教育っていうのが、何となく良いのではって思います。

今、中に馬車がありますけど、そこでも炭鉱のトロッコを持ってきて走らせるとか、博物館をつなげるとか、なんかそういうあると面白いかなと思っていました。その炭鉱については、今、産業遺跡遺産として結構注目されていますよね。立坑みたいなものを見せて、知事が夕張市長でしたから、夕張の炭住をこっちに持ってきてっていうのは、なんとなくのってくるのではないかと。

やはり、僕らの世代でしたら幸福の黄色いハンカチとかね。ああいう映画を、昔の昭和の時代の映画を結びつけるような形で炭鉱街というのを持ってきて宿泊を合わせて、もしできればそこに飲み屋街もあればいいかなと思うけど、それはちょっと無理なのかもしれないけど。また、ああいう僕が子供のころ育った町っていうのは、もうすごい活気があって、やはり炭鉱にも風呂屋があって映画館があって本当に汚らしい飲み屋がわーとあってね。これで本当に汚いおじさんたちがいっぱいいて、そういう何かちょっと綺麗な観光っていうよりはもっとその人間臭いような、なんか味わいのあるような場所っていうのが、開拓の村にもあると面白いかなと。

それでそういうもののところを使って子供たちの体験型の学習っていうのができればいいかなというふうに、なんか頭の中で妄想だけで言いましたけど。

それで、これはどこでも言えるのですが、資料の3ですね。情報発信の強化体制とか SNS、インスタ映えとかあるんですが、実はどこもですね、こういう通信環境については貧弱なんです。特に Wi-Fi ですね。ものすごく弱いです。Wi-Fi ありますとかって言うんですけど、繋いでみるとものすごく遅いですよね。今の時代、これ 5G とかね、新しいものが出てきていますし、インターネットも今まで 1 ギガっていうのが、一番あれですけども、10 ギガとか 20 ギガっていうのも出てきていてですね。だからそういう通信、こういう SNS とか、こういうようなことを言うのであれば高速インターネットっていうのは必須なんです。だから、その辺のインフラ系のところ。

だから、子供たちを修学旅行で呼ぶにしても、海外の人を呼ぶにしても、やっぱりこれ Wi-Fi は必ずなくてはいけないし、それも高速じゃなくちゃいけないっていうことで、そこに少し予算を投じてですね、このエリア全体で Wi-Fi が使えるような、そういうようなことになるとですね、これは非常に来るお客さんも情報発信もかなりやれるよ

うになるのではないかと思います。

この前、倶知安町にちょっと行った時に、倶知安町の人が話していたのが、台湾の人が羊蹄山をサイクリングで回るといふんですね。それでそういうお客さんが来る人たちが困るのがWi-Fiだということで、羊蹄山の周りの道路を全部Wi-Fi、どこでもWi-Fiが使えるようにしたいみたいな。そんな話をしてみましたですけども、

それと同じように、このエリア野幌エリアを全部このどこでもWi-Fiが使えるような、そういうような形になれば、一つの魅力にもなるかなというふうに思うのですが。

それとちょっと長くなるとあれなので、最後に一つ、このエリアの名前なんですけどね、この横の繋がりをしなくてはいけないって言うことを言いながら、この一つのキャッチーな名前っていうのがないんですよ。例えば、今だったらウポポイとかね。なんかそういうような名前で、この野幌森林公園エリア活用とか、交流空間構想とかっていうようなもので、何か一言で、アイヌ語であっても、日本語であっても、英語であっても良いと思うんですが、何とかって言うふうな一言で表せるような、このエリアについての名前をつける、或いは募集をして広めるって言うふうな、そういうことが、必要ではないのかなあって思ったんですけど、どうでしょうか。以上です。

(石森座長) ただいま、最後のところでご提案いただいた、このエリアの「愛称」募集というアイデアはとても重要ですね。この地域の方々にいろいろな愛着を抱いていただくためにも重要な提案だと思います。

金子委員のご指摘のように、このエリアの周辺には、大学や小中高を含めて数多くの文教施設がありますので、それらの小中高・大学のための研修施設や簡易宿泊施設があっても不思議ではありませんね。また、現在の北海道でもMICE(会合・報奨旅行・国際会議・展示会等)が極めて重要になっていますので、このエリアでもMICEの振興を図ることが求められています。

指定管理者制度の問題も含めて、中島委員に追加のご意見をいただければ幸いです。

(中島委員) 先ほどはすみませんでした。ある程度、補てんを受けられるとのお話をいただきました。

道庁さんの方で、環境生活部さんの方で建物の改修工事を毎年行っていただいております。我々が行っていただいておりますと言うとちょっと変な感じかもしれませんが、今まで何もできなかったのが、この数年2棟ずつ建物の改修工事を行っています。

東京の江戸東京たてももの園とか川崎市の日本民家園さん、それから明治村さんとかに行くと毎年のように改修工事を行っている。改修工事を行っているっていうのが生きている博物館と我々言うておまして、あとちゃんと資金を投入しているんだなっていうことで、開拓の村もこの数年は改修工事を行っているので、お客様からも好印象に受け止められています。

ただ、改修工事の順番ですね。順番っていうか、なぜこの建物を直すのっていうところが、まだ我々指定管理者と、北海道との間で意識の乖離があるように思われます。ただ北海道の意識というのが、ここにおられる環境生活部さん本庁ではなくて、どうしても窓口の北海道博物館でその優先順位を決めてきたという経緯があったり、設置をしてきた経緯がありますけど。

そうすると、例えば今、金子先生からお話があった開拓の村の宿泊体験、我々も独自で平成5年から10年間やって参りました。青山家、漁場に泊めたりとか農村に泊めてみたりとかして。それを我々が20代だから出来たのですが、50代ではとてもじゃないけど、体がもたないからやめてくださいと。ただ、それも我々が独自でやるから止めたの

であって、例えば、野外活動の民間団体さんとかとジョイントすればできないことはない。

ただ、今ある建物に子どもたちを泊めるってことに対しては、建物保全上考えていかななくてはならないことがある。現に、今の来正旅館という建物の2階を立入禁止にしているんですけども、何故かというとな建物歪んでいるから。そうバランスが崩れるっていうことはないのですが。また、当時、この旅館には、大体毎日泊まっても数十人です。ところが開拓の村では毎日何千人も入れていたら建物もおかしくなります。だったら、それなりに強度を保つ構造にしないとイケない。

例えば、これから直す時、改修工事する時というのは、今我々が行っているこの中で、宿泊も伴うような事業をやりますよという場合には建物もそれに伴うような設備、設備とは言わないまでも強度とかっていうものを図っていけば、我々もノウハウがありますし、できると思います。

ただ、炭鉱住宅となると、いろいろと私の知らないところで経緯が、中止になった経緯があるらしいですが。元々炭鉱住宅群ってのあったんですよ開拓の村にも。アイヌ住居群もあったんですよ。当時の計画には。それでこちらにいる道庁の方も若くなったので、もしかしたら、開拓の村の経緯がわからない方々が道庁の職員にも結構おられるんですよ。なぜ開拓の村が出来上がったのかっていうのが、単純に北海道100年としての意味ではなくて、そのときには、北海道工業大学の名誉教授遠藤明久さんとか高倉新一郎さんとかの方々が、その当時の町並みを再現する施設が欲しいっていうところから始まった。それが町並みが漁村群であり、市街地群であり、山村群でありという。

こんな博物館、全日本にないですよ。そんなストーリーが展開できる場所というのは。物語が達成できるのっていうのはないんですよ。明治村にはないんですよ。ところが、これがだんだんと薄れてきて観光だけになってくると、その説得力がなくなってきて、でも我々指定管理者がボランティアの人たちを通して開拓の村はこういう経緯で出来上がっていて、こういう使い方ができるんですよって中々追いつかないというのが現状なんですよ。

ですので、例えばそういったものでは建物の改修工事でも、我々とそれから道庁さんとか意識統一していれば、次に直す建物はこういう工夫をしてもらいましょうとか、仕方。今の直し方は現状復旧ですよ。現状復旧だから何も出来ない。例えば酪農畜舎直しましたけども、そこでアイスクリーム売りなさいとかバター作りなさいとか言われても、何も出来ない。結局はテント立ててやっている。

こういう使い方をするので、こういう直し方をしましょうとか。でも、やはり伝統的な学芸員になっちゃうと、現状復旧。現状復旧する。そうするとまた同じことが20年後、同じこと繰り返すんですよ。

だから、その点、例えば千葉県にある房総のむらみたいに、あそこは建物に文化財的な価値はないかもしれないけど、こういう使い方をしますって言ったら建物の後ろに、例えば、調理室があるとか、何かあるから買い物ができるという。開拓の村だったらこういう対応していければ良い。ところが何一つ今のところ出来ない。

指定管理者も4年で変わるので仮にやったとしても、4年目はもしかしたら、次我々が手を挙げても勝負に負けるかもしれないっていう中で現状復旧なんですよ。建物の中をイノベーションして、ある程度やってもまた現状復旧して、勝負に勝ちましたよ、また次の指定管理の時はまた元に戻しての繰り返しなんですよ。

そうすると、今ちょっと構造的なものを言っていますが、指定管理者制度ができて4年が妥当なのか。5年が妥当なのか10年が妥当なのかって、いつか石森さんがおっしゃったように、大阪のケースみたいに30年が妥当なのか、それは議論があると思

うんですけど。我々が稼いだ金で、資本注入するんだったら4年間は無理なんですね。とても回収しきれないですね。じゃあ何年間だったらいいのか。その辺は、例えば、指定管理者に物も委ねていただけのんだったら、ニトリさんだって4年間では多分資金回収できないわけですよ。

指定管理した場合は、何年間で資源回収できる見通しできるのだったら指定管理者制度そのものの期間を何年にすることによって、民間の資本価値を注入できるっていう。今の段階ではビルとかと同じような指定管理期間なので、結局は管理だけっていうことになってしまうので、例えば、民間さんもうまみがないという。まず資本注入して、そこから種をまいて芽を出して、実を取るまでに何年かかるのかっていうことを視野にいただければ、今、石森館長がおっしゃったような民間活力の何とかっていうのはできるという。

ただ、平成18年以来の今の指定管理者制度では、我々もノウハウはあるけれども、資金というか保存基金を立ち上げてかなりの額は投資してきていますが、本来道でやるべき修繕が追いつかないのが現状です。ですので、その間に開拓の村の建物がどんどん古くなる、どんどん壊れていくっていう中では、今、価値はあるんだけど、お客様に対しては、単なるボロ家ってなってしまうので、それは道の方で例えば、札幌市にお願いして、札幌市の指定文化財になるとかっていう方法もあるかもしれないんですけど、ただ登録有形文化財にしても、うまみがないけれども、お客様からしてみれば、何もない建物よりも、有形文化財というのは、例えば四国村の建物は政府の有形文化財になっていますし、そういったところがやはり先ほど角先生がちらっと言ったけど、文化庁の方がここは指定重要文化財の価値はあるけれども、うんと言わないというのは、うんと言わないのは、誰がうんと言わないのかって言ったら大体分かるんですよ。結局は万が一、改修工事になった場合は、この建物が1億円かかったけど5000万も道は出せませんよって話になるわけですよ。そういうことを考えたら何もできないですね。

ですので、いかに価値があるのか、それからこれは教育資源になるのか、観光資源になるのか、地域資源になるのかっていうこと考えていくと、先ほどニトリさんの方で小樽経営していますけども、今小樽では、マイカル小樽で思うようにいかなかったから新しい建物とか新しいモニュメントを作ることができないということは、埋もれている資源をどうやって見出していくのかって時に、漁場資源っていうものが、平成20年に文化庁のお金で一つずつ改修工事しましたでしょ。でもそれも結局、修学旅行生を招き入れて、昔のニシン漁のお話をさせて、翌日は地域の祝津界限をクリーニングさせるっていう一連のプログラム組んでいるんですよ。

ですから今、開拓の村も、それから森林公園も新たなものを立ち上げるじゃなくて、今ある資源をどうするのかっていう時に、森林公園というのはこうやって出来上がったんだ、こうやって守られたんですよっていうことが、果たして我々理解しているのか。

森林公園物語という本もあります。でも、あれをお読みになった人はどれくらいおられるのかという。開拓の村はどういう経緯で出来たのか、百年記念塔はどういう経緯で出来たのか。百年記念塔を壊しますというときは、はっきり言って開拓の村も明日は我が身かもしれない。こういう経緯で説明すれば開拓の村も壊されるのかという。それが一番怖いんですね。百年記念塔を壊す時も説明をきちんとすれば、反対派は納得していただけるかということ。次は開拓の村を壊すときにきちんと説明すれば、開拓の村を壊すことできるんだって。

ではなくて、今、不幸にも外国のお客様来ていただけないんですけども、特に欧米の方は開拓の村に、自分の住んでいる国の文化を理解すると同じ感覚を開拓の村に持ってきていただいているんです。こんな素晴らしいものがあるのに、なぜそういった面を

PRしないのかっていうこと。彼らは9時に来ると夕方までいるとか、そういった観光の仕方をされているんですよね。ですので、私もそうですけれども今観光で何かって言ったら、これはある社会教育の方がお書きになったんですけども、古くは中国の易経から出ている四書五経でしたっけ「国の光を見ることが観光から来ている」わけでしょう。今の観光の仕方が、修学旅行もそうですけれども、地域のことを知ってという観光に日本人もなっているので、滞在時間とか滞在期間を含めて。そうすると開拓の村のこの施設が北海道を知る上で、どういう役割を果たすのかっていうことを、ぜひ、この場を借りて皆さんにご指導いただければと思っています。

北海道博物館では、北海道のこういうところが勉強できる。北海道大学総合博物館では勉強できない。どうしてもみんな向こう行っちゃいます。何故かという申し訳ないですけど、構内にあるカフェも充実しているとか。それから資料も余すことがあるんですけども、ある程度魅力がある。それとあそこの鉱石コーナーに行くと、僕も大好きなんですけど。北海道博物館だって、ああいう見やすい展示になったけども実はっていうところ見せるとかっていう。やっぱり観光が変わってきているので、そういうところを、もし次年度以降も指定管理させていただければ、いろんな方々にいろんな団体の方々と協力しながら、道庁さんの指示を仰ぎながら、この一体の活性化じゃなくて、生まれ変わりをと思っています。すいません。どうもありがとうございました。

(石森座長) ありがとうございました。

指定管理者制度そのものについて、例えば指定管理事業期間の問題などを含めて、なにかご意見はありますか。

(中島委員) すいません。その指定管理者制度というのはもう、平成15年からやっているの否定するものでは全くありませんし、ただ、細かいところは良いですけども、指定管理者が独自のものを企画するのではなくて、今我々がこれに基づいて、指定管理者さんにこれにプラスアルファのことをしていただくとか、そういったことを発注者側がきちんと明確にしていればなと思うんですよね。

事例としては、あまり良い事例ではないかもしれないんですけど、前も言ったけど、長崎の場合は成功例としていただいているんですけども、発注者と指定管理者の間で毎週のように協議を行いながら、例えば数値的な目標も含めて。今月は売上が低かった。指定管理者にどういう原因かというのを、発注者側が。指定管理者が天候の不順とかでとか。そういう積み重ねで、発注者と指定管理者がコミュニケーションを図りながらパートナーシップを築いていけるんですね。

もう一つは、その負担金なんですけれども。負担金も先ほどありましたけれども、ただ削るんじゃなくて、この開拓の村とか森林公園一带があることによって、どのぐらいの北海道にとって経済効果があるのっていう。前も言ったけど。それによってこれだけ経済効果があるんだったら、そこに対する北海道がここに対する資金注入どのぐらいかかっていうことが見極められると思うんですね。今のやり方っていうのは、単なるコストカットありきですと、それから、知事部局の直轄だけ考え方は教育委員会の考え方。限られた予算の中で、ここにはここ、ここにはここじゃなくて、観光というからにはこれだけ経済効果があるんだからっていうことを見極めていただけると、自ずとそこに対する資金注入の仕方は、額も変わってくるし見方も変わってくるんですけども。

今そういった視野がないので、指定管理者だって、もやもや感がある。不信感も生まれてくる。なので、そういった面では、指定管理者制度っていうものが否定はしないんだけど、北海道さんの指定管理者制度に対する見方っていうものを、今一度全国の

失敗例も含めて、ちょっと精査していただければなというふうに思っています。

期間については、あるところが8年を4年に戻すとかわけの分からないことを言っているところがありますので、あまり言うとかあれですけども。多分先ほど言った期間については、指定管理者がやりたいことじゃなくて、発注者が示したことに肉付けをするための期間としての4年間は短すぎるとなります。

そしてもう一つ最後に言わせていただきたいのは、この中にも一部出ていましたけども、その人材育成っていうものに対しては、この北海道が札幌農学校の開設当初から一番教育目標に挙げたのは人材育成だと。それに基づいて、この北海道が急速に発展するのは、その育成された人材が北海道を引っ張ってきたからというそういった自負感というか、プライドが我々には、あってしかるべきですね。ですので、北海道の人材をまたこれからという時に例えば開拓の村は、例えば瓦職人をつくる人材を育てるとか、マサ屋根職人の作る人材を育てるとか、もちろんマーケットが狭まっていることに対して、ここがこの中核の地点になってくる。今マサ屋根もある業者の方々が一手に引き受けています。一手に引き受けているということは、言い値でやっているわけですよ。ところが北海道の人材が育てば、仮に同じような金額だって、北海道でそういった人材を使えば、北海道のから本州に打って出ることができるっていう。そういった職人の人材もそうですし、そもそも観光を担う人材というものもこれから出てくるんです。

今観光の人材なんかも、札幌国際大学さんそれから北海道大学さんがおやりになっていますけれども、大学で教えるのもそうですけども、実際にゲストを迎えるのは、一般の人々、道民なんですよ。道民の方々が、北海道を誇りに思えるような、プライドを身につけるためには、北海道の人に勉強してもらわないといけない。

それは北海道のマイスター試験っていうものだけじゃなくて、日頃の勉強していないといけないんです。そのための場所は博物館であり美術館という。先ほどちょっと言いますけど、その生涯学習の観点からすると、地元学や地域学を学ぶ場所っていうのは、博物館、美術館の他にないのかなと思ながら、こうやってボランティアという人材を養成していますけれども、彼らだって北海道を誇りに思うからこそゲストをお迎えすることができるので。そうするとそれが、2035年の414万に下がるという人口の中で、出ていきますけども、この中で、次の世代、その次の世代達が北海道引っ張るためには、北海道こういうところなんだ。北大も札幌農学校時代はすごかったんだということ。そういうことを防ぐためには最高のステージだと思っています。

ただ、それを我々の任せていただけるのであれば、その指定管理者制度の中の博物館の中では、期間と、それからそういった事業をこなす負担金の問題と、それから指定管理者の業務に目を光らせる発注者の方。丸投げではなくて。言い方悪いけど目を光らせるというのは、我々がやっていることをチェックする。丸投げっていうのはあまり良くないと思います。丸投げすると、一番悪いのは、開拓の村が我々の物とってしまう時があるんですよ。これが一番悪い。博物館の職員はみんな俺の物とってしまうことがあるではないか。そして資料に触るな、動かすなと言う。それは絶対言うてはならない。誰のものだとなったときに、道の物だと市の物だというときに、じゃあ触るな動かすなと言う時もあるんです。我々一番危ないのはそこ。開拓の村は私たちの物になりつつある。そのチェック機能が今はない。明らかに我々は道有財産を預らせてもらいながら活用するっていう意識を持っておかないと。

(石森座長) 角委員が館長を務めておられる網走監獄は、指定管理者制度ではなく、民間の財団法人として運営しておられますので、必ずしも指定管理者制度でなくてもいいのではないかというようなご意見もあればいただきたいと思います。

(角委員) そうですね。札幌市のいろんな諸施設の歴史的なものの指定管理者の選定委員を長いことやっているのですが、そのときに思うのは、今、札幌市は5年になったんですが、その前は4年。年度があがる時に、次にもう一回ふるいにかけてはなかなかならないという時に、先ほど、中島さんが言われたような事例もあって。それから、まだやって欲しいなっていう団体が、やっぱ利益が上がらないので、はっきり言うと豊平館なんですけれども、今年、手を引いたんですね。

大きな会社がとっていたんですけど、そこに導入されてくる人材が、会社を退職された方々で、例えばクレーム処理担当の方々だとか、そういった方々だと歴史的建造物であるという建物に対する愛情みたいなものってあんまり感じられなくて、そこで、見に来るお客さんと、職員の方の間の微妙な温度差っていうのが、もっと言うと、言い争いみたいなことが発生する。こんなことも知らないのかっていうふうに言われたりですね。そのようなことがあって。

僕はやっぱり指定管理者制度自体を、すべての施設に当てはめるのは中々難しいのという気はしています。いわゆる普通の管理ではない。公益財団が運営する網走監獄の場合は、最初から財団法人でやっていますし、実は今年で37年になりますけれども、最初からおられる人が今の事務局長。それから、もう少し後に入りましたけど、副館長も長い。僕たちが懸念しているのは、その2人がやめた後の継続性ってどうなるんだろうと。そののところが上手に繋いでいかないと、いわゆる指定管理者制度を対応しているところと同じようなことも起きる危険性もある。

幸い理事会だったり評議委員の先生方は、みんな網走におられる方々なので、昔からその歴史、でき上がっている歴史を知っている方なので非常に積極的に、漁協関係の人にもいろんな人がおられますけども、やっぱりその建物というか施設を何とか良い方向に持って行って欲しいという、そういう前向きのいろんな意見が出るんですね。それを言ってみれば、次のステップにどう展開していくかであったり、またその辺の色々文句を言う人もけれどもその文句の中に生産性ある文句っていうのがあって、それがやっぱり助かっているんですね。それはやっぱり地元の人たちが、これまでずっと継続して行ったプロジェクトの内容をよく知っていて。

例えば、刑務所施設は、地域では迷惑施設みたいに言われますけど、網走に関しては、これがあったから町が発展したというDNAがあって。かつて、昔刑務官をしていた方がわざわざ網走博物館、移築された建物に見に来てそこで昔話をしてくれたり。そんな繋がりが感じられて。

だから、先ほどの指定管理者制度っていうのは、なんか非常に機械的に切っている感じがあって、じゃあ何十年もというときに、今度そこでもいろいろと言いは悪いけど癒着みたいのがあったりですね。そののところがちょっと嫌って、ああいう形になっているとは思いますが。じゃあ何年がいいのかっていうのは難しいですよ。ちょっと一時期、例えば、ずっと入場者数減っても、そのあと持ち上がったときにそれはそこでのいろんな反省が次のステップになってくるので、一概に減ったから、指定管理者駄目っていうふうに僕は言えないと思う。だから、今、僕は指定管理者制度は、一般的な施設管理とこういう文化に関わる施設とは多分違うじゃないのかなっていう意見なものですから。ここのところの温度差はあるような気がしますよね。

(石森座長) ありがとうございます。

お開きの時間が迫ってきましたので、天池委員に民間のお立場で何かご意見があればお願いいたします。

(天池委員) 全体的にですね、色々と貴重な話を聞かせていただいて、非常に新しい発見もあったなというふうに考えております。

今は先ほども申し上げましたけれども、これから海外のお客様は2、3年くらい少し厳しい状況で、3年後、4年後に収束していけば、また復活もあり得るという流れの中で、当たり前揃えなければいけない設備であったり、先ほど話もありましたけれども、そういったものはしっかり備えた上で、やはりしっかり力点といいますか、目標をおき、そして今ある既存の施設であったりですけど、価値を高めるための打ち合わせといいますか、状況を作っていくということが複合的に重なっていけば、必ず先ほどの愛称の問題もありましたけれども、非常によい空間エリアになっていくのではないかなというふうには思っております。

ポテンシャルは本当に高いものがあるので、どれだけ地域の住民の方々であったり、観光客の方だったり、広い意味でも先ほど皆さんおっしゃっていたけども、プロモーションであったりですねそういったものを複合的に絡めながら、最終的な目標は先ほども、所課長が申し上げましたね、人に来てほしいと、いっぱい来てほしいということなので、そこにしっかり目標を定めてですね、色々な種別のお客様がいらっしやると思うんですけども、観光客の方もいらっしやると思いますし、地域の方々もいらっしやると思うんですけども。そういった意味で広い客層といいますか、そういったものを掴むためにどうしたらいいのかというアイディア出して、重ねていければ、必ず持っているポテンシャルは高いがあるので。

先ほどの世界三大美林もありますし、建物の良さとかもありますし、これもしっかり複合的に考えながら、目標を決めてスタートをしていけば非常に、間違いなく良くなっていくのではないか思っております。

ただ、中島館長がおっしゃっていただいたというように、実際やってみるところの問題っていうのは、我々も現場をやっているのわかりますけれども、非常に細かいところが出てきますね。それをしっかり解決しながら、逆にそれをエネルギーにできる仕組みを整えていくことが、必要ではないかなというふうには思っております。

やはり文化観光ですから、文化という分野、どちらかと言うと画一的に狭く深く入り込んだ状況が常に出てくるという状況が必要だと思いますし、あとやはり来たお客さんが、来て良かった楽しかった、また来ようと思える対策っていうのもやっぱり同時進行で考えなきゃいけないと。

非常に、持てる施設ごとの目標とか、成り立ちがそれぞれある中で、どうやって目標を決めるか難しいと思いますけども、ある程度多くの人に来てもらいたいということであれば、しっかりとしたそのコンセプトを決めてですね、やっていければ良いかなというふうには考えております。

あとは、新しくいろんなものをグレードアップ、仕組みもそうですが、グレードアップしてくのであれば、やはり資金の投入というのは必要なんじゃないかなと思います。そこは、弊社の会長の似鳥の言葉を借りますと、民間の資金力、力を導入できるような、座組であったり、仕組み或いは、ワークフローか、ワークフレームだとか、それができれば、我々も北海道に貢献したい思いが強いものですから、何らかの形で力はお貸しできるのではないかなというふうには思っているのです、そこは本当に仕組みだったり、制度をその辺をどう民間の活力を参画しやすいようになるのかというふうには思いますので、ぜひそこをご検討いただきたいなというふうには思っています。

建物の価値が一つの上がるとですね、それに入って何かやってみたいというのが必ず増えてくるわけです。そういったものであります。そんなところを積み重ねられれば良

いのではないかと考えております。以上です。

(石森座長) ありがとうございます。

特にご指摘のありました民間活力につきましても、言うのは簡単ですが、民間企業は厳しい方針や基準に基づいて経営を行っておられますので、このエリアの再生事業に協力いただくのは容易ではありませんね。そのような点も十分検討しなければなりません。生川委員、最後に何かご意見があればお願いいたします。

(生川委員) 先ほどから皆さん、人材の問題がすごく課題だと。このエリアだけに限らず、道内の各地域で観光ボランティアガイドの方が活躍されておられますが、随分ご高齢になられて、後継者不足で減少傾向になっていると聞いています。

ただ、この開拓の村では、長くボランティアの方が頑張っておられると聞いていますけど、先ほどの人口減少問題ではないですけど、そこへの手立てというのは必要だと思います。先月、私も休暇をいただいて、道東のサロマ湖のワッカ原生花園に行ってきたのですが、たまたま土曜日で地元の常呂高校の学生さんが、奉仕活動の一環で、毎週土曜日だけ、訪れた観光客にボランティアでガイドするという微笑ましい光景がありました。実際にガイドしていただきましたがすごく印象に残っています。有料・無償を問わず、地元の方との交流というのはすごく大事だと思うので、ソフトの部分（人材育成）も、全体に関わってくることだというふうに認識しました。

あと民間の資本を注力することは大事で、地域貢献という意味でも重要で、クラウドファンディング、それから知事が提唱する北海道応援団。指定管理制度が阻害をするのであれば、少し柔軟に対応いただければ、すごく良い形ができていくのではないかと思います次第です。

(石森座長) ありがとうございます。

金子委員、最後に何かご意見があれば、お願いいたします。

(金子委員) 先ほど全体のキャッチフレーズみたいな話をさせていただきましたけど、この横の繋がりというのが一つやっぱり弱いのかなと気になるんですね。

そこで、先ほど、ちょっとお話をさせていただいた学校の教育と結びつけたプログラム。ちょうど話が出たようなボランティアとか、インターンシップとかですね、そういうような研修プログラムを4機関なり3機関で作って、横断的に実施できるような、それも1日だけじゃなくて、3日コースとか5日コースとか、必ずこの辺に泊まらせるようなコースをプログラムとして作って、そんなことを逆に大学側もそのコンテンツ作りでいろいろお手伝いをさせてもらったりとか、そういうことができると思いますので、野幌とそれから大学との連携っていうものも生まれてくるかなというふうに思います。

そういうことで、うちの学生なんか見ているとですね、ただ単に表のところを見てみるっていうよりは、博物館だったら収蔵庫行ってみたいとか、実際にその標本とかそういうものに触らせて、仕事をさせてもらいたいとか、そういうニーズがすごく強いですね。だから単純な博物館に行って入ろうっていうよりは、ちょっと収蔵庫とか裏を見せてくれるように。動物園もそうなんですよ。動物園も飼育の学科が飼育係になりたいっていうのが多くて、入場料払って動物園行くっていうのではなくて、動物園の裏方で飼育員さんが何やっているか見たいと。そうしたらあつという間に人が来てですね、すごい人数になります。

そういうような形で、開拓の村でもボランティアでさっきの補修じゃないですけど

も、手伝いをさせるとかですね、そういうのを、逆にお金を払ってでもやりたいという人たちがいっぱいいると思うんですね。

ただ、それを高校なり大学なり研修と上手く合わせてですね、一つのパッケージのインターンシッププログラムみたいなのを作って、呼びかけるというようなことをやると、結構この横の繋がりがっていうのも出てくるんじゃないかな。そういうふうなふうに思いました。

(石森座長) どうも皆様ありがとうございました。

これまですでに皆様方から様々なご意見やご提案をいただきましたが、本日もまた貴重なご意見やご提案を聞かせていただきました。皆様方のご意見を通して、このエリアには様々な貴重な資源や価値が付与されていることが明らかになりました。

本日は冒頭で金子委員から、低地・平地という条件付きではあるけれども、野幌森林公園は「世界三大美林」の一つだという大変重要なご指摘がありましたし、北海道開拓の村もすでに重要文化財指定の歴史的建造物がありますし、その他にも登録文化財に値する貴重な文化資源が数多く存在しています。北海道博物館も様々な形の資源を有していますので、公開の展示などだけでなく、金子委員のご指摘のとおりバックヤードというか、バックサイドには極めて重要な諸資源が所蔵されています。野幌森林公園というエリアが有する貴重な資源や価値をより良く活かして、このエリアの活性化を図って行く必要があります。

その際に重要なことは、このエリアにおいて、「民産官学の協働」体制をより良く確立して、地域のもつ様々なパワーをより良く活かしながら、エリアの活性化を図っていく必要があります。その際に、外からの来訪者としての観光客や修学旅行生などの誘致も重要であります。現在はコロナ禍で国内観光もインバウンドも極めて厳しい状況にあります。文化観光拠点としての強みをより高めていくことによって、このエリアの再生をより確実なものにしていく必要があります。ただし、ポスト・コロナにおきましては観光を巡る地域間競争がより激化していくことが予想されていますので、このエリアの特性や独自性をより明確に活かすかたちで地域振興・観光振興を図る必要があります。

本日いただきましたご意見やご提案につきましては、事務局の方で取りまとめをしていただきます。そして最終的には、議事録等々も含めて、皆様方にチェックをしていただくこととなりますので、宜しくご協力をいただけますようお願い申し上げます。

今回は第3回目の懇談会ということで、本来であれば最終回のような趣があるのですが、先ほど所課長から話がありましたように、今後、近隣地域の連合町内会に対してきちんと丁寧に説明を行う必要があります。

本日皆様方からいただきましたご意見やご提案をすでにいただいているものに付加し、より充実させる形で、地域の方々に提示してご理解いただくことが大切になります。鈴木知事も地域に対して丁寧に説明を行い、理解を得るようという指示を出しておられますので、今後は近隣地域の連合自治会との話し合いを重ねるプロセスで、新たな意見が出される場合もありますので、今回が最終回ということではなくて、何かあればまた各委員にもご相談をさせていただくという意味合いで、一応は懇談会を継続ということでもあります。

その点、宜しくご理解をいただけますようお願いいたします。

(所課長) 本日、貴重といいますか、私たちが活用をイメージとして提示した枠を超えた重たいご意見をいただいたと思っております。これをまとめていきまして、先ほど座長からお話がありましたように、我々の方で地域の方々と意見を交換しながら、最終的とりまと

めをしていきたいと思っておりますので、改めて経過等々につきましてはご報告させていただきます。

(成田局長) 今日は長時間ありがとうございました。

貴重なご意見をいただきましてありがとうございます。冒頭申し上げましたように、平成30年12月に空間構想をまとめさせていただいて、今回の活用の方向性というものを活用イメージという表現をさせていただいていますけれども、方向性をプラスするという形ということで、先ほど座長の方から話もありましたけれども、活用イメージという項目を今回出すと、メニューを出すということで、次のステップはそれをどういうふうに行うかというところになってくるのかというふうなふうに思っております。

先ほど、観光と言う視点からお話をちょうだいいたしました。資料の方にございますけれども、まさしく今年の5月に、この文化観光推進法というのが施行されていますけれども、これは文化庁が所管しております。そのこの見解に関しましては、先ほど申し上げました道教育委員会それから環境生活部、行政としてはそこで連携しなければなりませんし、加えまして、観光業界の皆様それから団体の皆様方の知恵を拝借しながら、やっていかなければならないということで、これは先ほど、人口減少というお話がありましたが、その先にある地方創生に伝わっていきますので、文化観光を地方創生に向けてどういうふうに進めていくかというところで繋がっていきますので、ここをしっかりとやっていかないといけないかなと思っております。

あと、先ほど、委員の方から余市の果樹園の話ですか。少々時間もかかる所にあるという話ですけど、エリア全体の中に私たちがお示ししている利用者アクセスの向上にも活かせると思いますので、こちらも知恵を拝借できたらなというふうな思っております。

それから百年記念塔の問題でございますけれども、それも色々話を頂戴いたしました。この空間構想とそれから活用の方向性、加えてこの記念塔のことにつきましても、地元の町内会の方々、それから学校の校章それから校歌で使っている小中高校もございますので、そちらの方にも、空間構想と活用の方向性、それから百年記念塔の考え方を丁寧に説明していきたいと考えております。

地元の方々への説明に関しましては、現指定管理者としてのお話いただいた中で、非常にいろんな厳しい話が出るんじゃないかというご助言をいただきましたので、いろんな所に伺った時にですね、色々な話が出てくると思いますが、それを踏まえながら、最終的に案としてまとめられればと思いますので、今後ともご指導を賜りたいと思っております。本日はありがとうございました。

(以上)